第9回

脱炭素社会の実現に向けて　高等学校・高校生によるエコ活動コンテスト

AEON eco-1グランプリ 受賞校が決定!

高校生の活動が世界を変える一歩に

日ごろからエコ活動に取り組む高校生を表彰し、優れた活動を周知しエコ活動の普及・推進を目指す、第9回イオン エコワングランプリ（主催／公益財団法人イオンワンパーセントクラブ、共催／毎日新聞社）の最終審査会と表彰式が、昨年12月5日に、新型コロナウイルスの影響を受け初のオンラインで開催された。誰もが取り組みやすい普及性の高い活動が対象の「普及・啓発部門」と、地域固有の問題に着目した専門性の高い活動が対象の「研究・専門部門」の2部門で募集し、合計95校132点の応募の中から10校が最終審査会のプレゼンテーションに臨んだ。

オンラインでも力強くプレゼン

最終審査会は、審査会場と全国の出場校・観覧校をウェブ会議システムでつないで開催。自らプレゼン資料を操作しながら、画面を通じて審査員へ自分たちの活動内容や成果をアピールした。

その後の質疑応答では、審査員や観覧校として参加している生徒から多くの質問があり、オンラインということを感じさせないほど充実した審査会となった。

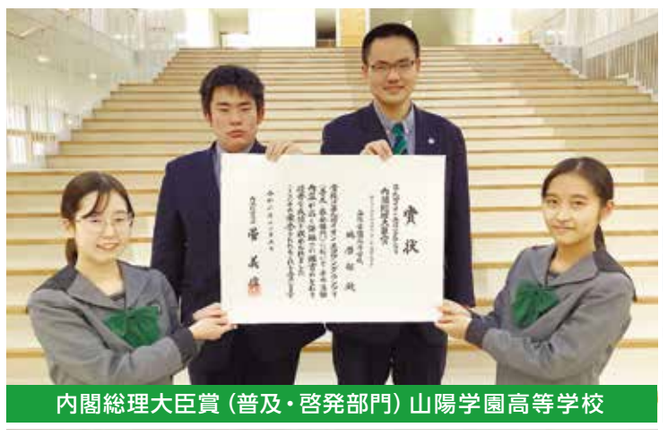
新型コロナウイルスの影響で活動に制約が出ている状況の中でも、高校生は今できることに目を向けて、試行錯誤しながら活動を継続させる学校や、新たに取り組みを始める学校も見られ、エコワングランプリの意義を改めて実感させた。

表彰式は、笑いあり涙ありの授与式となり、受賞した生徒からは「今まで研究を頑張ってきて良かった」という声も聞かれた。

プレゼンテーションの様子は2画面同時配信

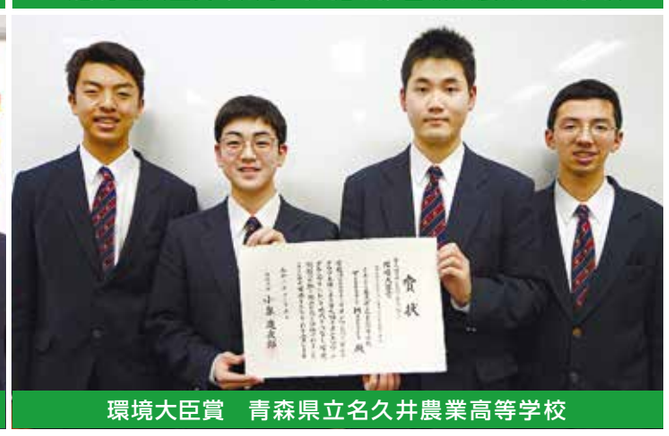
審査会場でモニター越しに質疑応答を行う審査員

当日の模様はYouTubeよりご覧いただけます


内閣総理大臣賞（普及・啓発部門）山陽学園高等学校

内閣総理大臣賞（研究・専門部門）宮城県農業高等学校

文部科学大臣賞　宮城県志津川高等学校


環境大臣賞　青森県立名久井農業高等学校

海洋プラスチックごみ問題に一石を投じたグランプリ校の活動

全出場校の発表後、厳正な審査が行われ、グランプリとなる内閣総理大臣賞など各賞が決定。グランプリには、「普及・啓発部門」では山陽学園高校（岡山県）、「研究・専門部門」では宮城県農業高校が選ばれた。両校ともに世界的に深刻な環境問題となっている海洋プラスチックごみがテーマではあるが、それぞれ異なるアプローチで問題解決に取り組んでいた。

取り残された海洋ごみを見える化

山陽学園高校は、地元である瀬戸内海の海洋ごみ問題に目を向け、一方的な啓発ではなく地域の人に「自分ごと」化してもらうために活動を推進。特に公的な回収者不在で、生活圏から離れた場所にあるため認知度が極めて低い、海底ごみと島しょ部の漂着ごみ＝「取り残された海洋ごみ」の回収・啓発に取り組んでいる。

回収活動は、漁業関係者の協力のもと、漁船で海底ごみを引き上げるだけでなく、ごみの地理情報などから分析、子ども向けの回収体験やその様子の撮影を通じた海底ごみの「見える化」にまで広げて実施。プレゼンでも、そのことで人と海洋ごみの距離を縮めていると強く訴えかけた。

漁業関係者と協力し、底引き網で海底のごみを回収

海洋ごみ啓発で住民の行動にも変化

海洋ごみ問題の啓発としては、学術会議への参加や出前授業を通じて発信を行っていたが、無関心の人や海底ごみを人ごとと考える人へ届いていないと実感し、店舗協力のもと、商品を購入する場である商業施設で海底ごみを展示。商品からごみへと変わる過程を日ごろから意識してもらうよう促している。

また、海洋ごみ起源の7割を占める生活圏にスポットを当て、岡山県に多い用水路のごみ調査を行い、ごみマップを作製して近隣住民にも周知を図った。その結果、地域の人が自らごみ回収を行うなどの成果につながっている。

審査員は、海洋ごみを身近な問題として意識してもらうアイデアを高く評価。生徒からは「回収したペットボトルを再加工し、資源として利用できるプロジェクトにも取り組みたい」と、新たな目標も聞かれた。

商業施設での展示会

逆転の発想でプラスチックゼロに

一方宮城県農業高校は、地元の閖上（ゆりあげ）海岸でごみ拾いをしていた際に至るところで見つけた、5ミリ程度の丸い透明な物体が、水田で使用されている肥料の残骸となったプラスチックであることを発見。プラスチックでコーティングされた肥料は、ゆっくり溶かすことができるため、追肥の重労働を軽減できるが、いずれ海洋の生態にも影響を及ぼす可能性もあるため、水田と海洋の課題両方を解決すべく研究を行った。

ゆっくり溶かしたいのであれば、溶けるのが遅い肥料「ウレアホルム」を使うことで代用も可能ではないか、という逆転の発想で仮説を構築。地元企業の協力を得てウレアホルムを含んだ新たな水田用肥料を作り、溶出実験の他、コスモスでの生育調査や水田での収量調査などを行ったところ、いずれも水田肥料として有効であると立証できる数値を記録した。

左がウレアホルム肥料、右が従来のプラスチックコーティングをした肥料

自分たちが発信していく意義を実感

これらの研究により、ウレアホルムを含む肥料は長期間効果があり、コーティング肥料の代替として使用可能なことがわかった。水田や海洋の環境保全に役立つこの研究は地元のメディアでも取り上げられ、生徒たちは「この問題は農業高校の先生、さらには農家の方も知らない問題だった。だからこそ、この問題を知った私たちが、たくさんの方法を使って広めていきたいと思っている」と話した。

審査員からは、着眼点や実証プロセスの素晴らしさ、さらに地域密着型で取り組んでいることが高く評価され、プレゼンを通じて初めてこういった問題があることを知ったという声も聞かれた。

水田で育てるお米の生育調査を行う生徒たち

C・W・ニコル メモリアル賞を創設

今回は特別賞として、第1回から審査員を務め、昨年4月にご逝去されたC・W・ニコルさんへの追悼と感謝の意を込めた「C・W・ニコル メモリアル賞」を創設。「あるがままに放置するのではなく、人の手で大切に守っていくことが本当の自然の在り方」というニコルさんの思いに沿ったエコ活動を展開した学校として、宮城県南三陸町の自然保護に取り組む宮城県志津川高校が選ばれた。

志津川高校が位置する南三陸町は、東日本大震災によって大きな被害を受けた地域。生徒らは、震災後形成された八幡川河口の干潟の生態系を調査することで、防潮堤工事の影響評価や地域の自然保護、さらには復興を目指す町づくりの取り組みにも寄与できるよう活動を行っている。生物調査からは、レッドリスト掲載種を含むさまざまな生物が生息する貴重な環境であることが分かった。2019年に導流堤工事で河川への水の供給が断たれた際にも、調査活動は継続して実施。その調査結果を受け、干潟環境を保つため、川や干潟の水が出入りするようパイプが設置されることにつながった。

審査員からは「世界的に湿地帯の減少が問題になっており、他の湿地帯での問題解決にも貢献できるよう頑張ってほしい」とコメントがあり、ニコルさんの思いと同様に、人間の手で自然を守る、この活動の今後に期待を込めて、同賞が贈られた。

［受賞校］

内閣総理大臣賞【普及・啓発部門】
山陽学園高等学校（岡山県） 地歴部
「私たちの瀬戸内海 ブルーオーシャンプロジェクト」

内閣総理大臣賞【研究・専門部門】
宮城県農業高等学校 環境保全部
「守れ閖上の砂浜!ZEROマイプラによる 食料生産と豊かな海作り」※ベストプレゼンテーション賞も受賞

文部科学大臣賞【普及・啓発部門】
宮城県志津川高等学校 自然科学部
「故郷の豊かな自然を守ろう! 東日本大震災による工事の影響評価」

環境大臣賞【研究・専門部門】
青森県立名久井農業高等学校 Treasure Hunters
「日本伝統の三和土を使った 集水システムの開発と普及」

審査員 末吉 竹二郎 特別賞
北海道標茶高等学校
地域環境系列環境ゼミガイド班
「学ぼう自然、守ろう環境 ～私たちが 発信する『自然再生意義』～」

審査員 吉川 美代子 特別賞
東京都立富士高等学校
探究未来学理系ゼミ
「セミの生態からみる自然豊かな地域環境を目指して」

審査員 ジョン・ギャスライト 特別賞
清風高等学校（大阪府） 生物部
「シロアリが日本を救う!?」

審査員 五箇 公一 特別賞
福島県立福島高等学校
スーパーサイエンス部バクテリアセルロース班
「バクテリアセルロースを用いたストローの開発と評価」

C.W. ニコル メモリアル賞
宮城県志津川高等学校 自然科学部
「故郷の豊かな自然を守ろう!東日本大震災による工事の影響評価」
※文部科学大臣賞も受賞

『エコの環』賞
山形県立山形工業高等学校
山工元気プロジェクト
「SDGs実践!! マンゴープロジェクト」

京都府立北嵯峨高等学校 生物部
「有栖川のカッパ流域ネットワークが育む 地域活性と豊かな自然環境」

エコワン活動賞
神戸市立科学技術高等学校 空飛ぶ車いす研究会
「使われなくなった車いすをもう一度」

優れたエコ活動を継続的に行う学校へ贈られるエコワン活動賞は、使われなくなった車いすを修理・再生してアジア各国に寄贈している、神戸市立科学技術高等学校　空飛ぶ車いす研究会が受賞しました。

審査講評　末吉竹二郎氏より

今年は新型コロナの影響で、参加校数がどうなるか心配していましたが、例年とまったく遜色がなく、内容も極めて優れた活動が集まりました。

今、世界ではアメリカやイギリス、さらに中国も、目標年を定めて環境危機に取り組んでいます。日本も、2050年までに温室効果ガスの排出量を実質ゼロにすると宣言しました。これは、高校生の皆さんにとって重要な意味があります。なぜならこれからの30年は、皆さんが大人になり、それぞれの人生を過ごしていく大事な時期だからです。

温室効果ガスの排出をゼロにするのは政府ではなく、私たち一人ひとりです。だからこそ、皆さんが自分の問題としてどう取り組むかが、非常に大切になってきます。

私は、「自分たちの未来は自分たちの手でつかみ取る」ということを身につけるのが、このエコワングランプリだと思っています。

審査員

国連環境計画・金融イニシアティブ特別顧問 公益財団法人イオン環境財団評議員
末吉竹二郎氏

キャスター、アナウンサー 京都産業大学客員教授
吉川美代子氏

ツリークライミングジャパン代表、中部大学教授 至学館大学客員教授
ジョン・ギャスライト氏

国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター 生態リスク評価・対策研究室室長
五箇公一氏

第9回 受賞校のくわしい活動内容はこちら!

イオン エコワングランプリ　検索

AEON 1% CLUB　毎日新聞